



菅野 純の 教育相談「夜の学校」

発達障害のある子に向き合う先生の駆け込み寺

第25回

避けて通れぬ問題



菅野 純

早稲田大学名誉教授

かんの じゅん 多忙な中で2つの地域での先生方へのコンサルテーションの会を20年以上続けている。



前回の「夜の学校」では、小学五年生の男子、B君の事例がクラス担任のA先生から報告されました。

★
「将来、犯罪者になるのでは」という不安

小学二・三年の頃は誰彼かまわらない暴力。いくら注意してもおどけた言葉や態度で、反省しようとしなない。四年生頃からは言葉の暴力へと変化するものの、新たに物隠し(盗み)・万引きが始まる。変わらないのは、B君の他児の立場をまったく思いやらない態度と、あの手この手で非を認めようとしなない態度。

「もう一人の僕がいて、そいつがやった」という言葉に、A先生は衝撃を受けたのでした。「自分の言葉がB君の心に伝わっている感じがしない」「無表情で笑顔がほとんど見られない」「相手が嫌がることや辛辣なことを平気で言う」「避けられている原因が自分にあるとは認めず、みんなから『迫害されている』などと言う」「母親も対応に悩み、『将来、犯罪者になるのでは』と不安に陥っている」。

B君のような、将来に不安を抱かせる

問題行動の絶えない発達障害のある子への指導（かわり）の方法について、私なりの考えをお話ししたいと思います。

★ 近年、気になる青少年犯罪

「なぜ、そんなことをするのか、理解に苦しむ」「不可解だ」としか言いようのない事件があります。昔で言えば「猟奇的犯罪」と呼ばれそうな事件の加害者が、未成年であったり、時には中学生のこともあります。犯行の動機の了解困難さ、想像を超える犯行の実際の残酷さ。こうした事件が最近増えているように感じます。いくつか挙げてみます。

神戸連続児童殺傷事件（一九九七年）

「酒鬼薔薇聖斗」と名乗る中三男子生徒による事件。「人を殺してみたい。人間の内臓や脳味噌の中身がどうなっているのか興味をもっていた」と自供。

西鉄高速バスジャック事件（二〇〇〇年）

一七歳の無職少年が高速バスを乗っ取り、牛刀で女性一人を殺害、二人を負傷させた。事件後の両親の手記では、発達障害のエピソードが多々見られる。

愛知県豊川市主婦殺人事件（二〇〇〇年）

高三男子生徒が他人の家に侵入し、六〇代半ばの主婦を刺殺、夫に負傷を負わす。「人を殺してみたかった」。

静岡タリウム殺人未遂事件（二〇〇五年）

高一女子生徒が母親にタリウムの入った飲み物を飲ませ、母親がタリウム中毒症状に陥り次第に衰弱していく様子を冷静に観察し、ブログに克明に綴る。母親を狙った理由は「身近な人間のほうが薬効を毎日観察できるから」。

奈良県大和郡山田親殺し事件（二〇〇八年）

一七歳の息子が就寝中の父親を斧とナイフで殺害。「人を殺してみたかった」。

佐世保同級生殺人事件（二〇一四年）

高一女子生徒が自宅マンションに同級生の女子生徒を招き、後頭部をハンマーで殴り、首をタオルで絞めるなどして殺害。遺体の一部を刃物で切断。重度の発達障害と鑑定される。

名古屋大学女子大生による快樂殺人事件（二〇一四年）

何の恨みもトラブルもない七七歳の婦人を撲殺。さらに高校時代の同級生複数に硫酸タリウムを飲ませ衰弱していく様子を観察、また焼死体を

見たいという理由で放火。「人を殺してみたかった」と自白。

北海道音更町の美容師殺人事件（二〇一五年）

一九歳の会社員の男性が、同じアパートに住む女性美容師を殺害。「人を殺してみたかった」と自供。

こうした犯罪の原因が発達障害としたいわけではありません。しかし、それぞれの事件の加害者の生育歴の中には発達障害のエピソードが、濃淡に差はありますが見え隠れしていることも確かです。

特に、①他者の心との通じ難さ、②相手の立場や気持ちを思いやる共感性の希薄さ（時には、欠如）、③自己中心のかつ被害的な犯罪動機、④この行為がどのような重大な結果につながるかの予測や想像力の欠如、⑤小動物虐待や「猫殺し」などのエピソードから無縁の他者の殺人に向かつて次第にエスカレートする「犯罪カーブ」など。これらは、今、学校で現実に生じている問題の延長にあるのではないかと思うくらい似ている要素があるのではないのでしょうか。

さらに生育歴にさかのぼった場合、「友達と遊ぶのが苦手だった」「言葉の背後に

ある意味が理解できない」「行動の切り替えが苦手」「急な変化に弱い」「興味関心の偏りが大きく、興味を持ったものには頑として取り組もうとしない」「音や匂いに過敏」といったような発達障害的エピソードが報告される例も少なくありません。

発達障害と犯罪の関連は、今後、脳科学を含む学際的な研究の成果に注目していく必要があります。同時に、学校教育として、心理学として、あるいは育児学として、今、何をなすべきかという大きな課題が残っていることも確かです。



もう一つの要因：環境要因

これらの事件には発達障害的エピソードのほかに、もう一つの共通点が見出されます。すべての事件の資料があるわけではありませんが、環境要因とも言えるものです。

例えば、一橋文哉著『人を、殺してみたかった―名古屋大学女子学生・殺人事件の真相』（角川書店、二〇一五年）には、次のような記述が見られます。

「両親は『マリー（仮名・加害者）の受験勉強やピアノのレッスンなど、成果が目に見える教育』には熱心だったが、思春期を迎えた娘の内面的な悩み、心の揺れや迷いには比較的無頓着で、娘の支えになるどころか、ほとんどアドバイスもできなかった」（親類男性）

「誰にも本音をぶつけることができず『いつの間にか、自己中心的で他人の気持ちをまったく考えないどころか、自分の感情さえ押し殺した、無感動な人間』になってしまった」（小・中学校時代の友人）

一橋氏は「甘やかし過ぎた放任主義が、マリーを常識が通じず、他人の気持ちを考えない、不可解な殺人者」にさせた大きな要因となったことは間違いあるまい」と、環境要因の中でも家庭の影響の大きさを指摘します。

環境要因には、家庭だけでなく、社会・経済状況や学校・職場など、いくつもの環境要因が絡まっています。

もし今の私たちに何か少しでもできることがあるとすれば、こうした環境要因に働きかけることではないでしょうか。

その環境は岩盤のような固さを持つものかもしれません。私たちの働きかけや投げかけはそうした岩盤に手鑿（のみ）で穴を穿つような微力なものかもしれませんが。しかし、手鑿で何十年もかかって遂に隧道を貫通させた先人もいるのです。一ミリでも二ミリでもよりよき変化に向かって進むことを信じて、やるほかないのです。



A先生へのアドバイス

前回、私は事例を話されたA先生に四つのアドバイスをしました。ここでは、これまで触れてきた発達障害と犯罪についての知見をふまえて、少し具体的にアドバイスしたいと思います（紙幅の関係で④は割愛します）。

①この時期にこそ（人間のよさ）体験を子どもはどのような場面で（人間のよさ）を体験するのでしょうか。具体的にいくつか挙げてみましょう。
・かけがえのない生命としての自分の体を大事に世話してもらえた

- ・不安だったり困ったりしたときに、抱っこして守ってもらえた
- ・幼く不完全な表現でも、にこにこして耳をよく傾けてくれた
- ・自分なりにやれたことを、喜び、ほめてもらった

- ・温かく元気の出る食事をいただくとき
- ・家族みんなが仲良くしているとき
- ・チャレンジする自分をしっかりと見守って応援してもらえた

- ・さらに前に進むことができるよう、生きる知恵や知識を教えてもらった
- ・安心してくつろげる環境にいるとき
- ・自分に関心を持って積極的に関わってもらえた

発達に障害があり、認知の偏りや関心の狭さが見られ、特定の物へのこだわりが強く、人情の機微が容易に理解できない子どもほど、こうした〈人間のよさ〉体験を自覚的に与える必要があるのです。将来につながる社会性や倫理感覚の土台となるからです。

② B君も悩んでいる

発達障害のある子どもは、「悩みとは知

覚されない悩みを抱えている」と言っても過言ではありません。私たちは、できるだけ想像力をふくらましてその「悩み」について考える必要があります。

自分が何ができないのか、何がわからないのか「わからない」。さらに自分からわからない状態であることを人からわかってもらえないことも、人のかかわりを苦手とする一因かもしれません。

ところが、実際の場面では本人の言動に困り感が表現されず、エヘラエヘラと開き直った態度を示したりします。かわる側が怒りたくなったり、「本人が困っていないならば勝手にすれば！」と指導を投げ出したくなったりしがちです。

一つでも二つでも、「わかる喜び」を体験させることが必要なのです。近年、急速に発達したユニバーサルデザイン教育は、「わかる・できる体験」から、「わかりたい・できる動機」を形成していく方法とも言えます。

③ 行動のレパートリーを増やす

問題行動のあったときは、その子と一緒に振り返ります。ただし、このとき、

お説教したり、叱ったりしないで、クールな態度で行うことが大事です。例えば、友達の筆箱を窓から投げ落とした、としまししょう。

教師「筆箱を投げられたC君はどうしたの？」

B君「『やめろ！』って言って泣いた」

教師「B君はC君を泣かせたかったの？」

B君「びっくりさせたかった、だけ」

教師「C君をびっくりさせる方法はほかにないかなあ？ できれば、びっくり

して、喜ぶほうがいいよね。一緒に考えてみようか」

ここで出てきたアイデアを一緒に書き出してみてもいいでしょう。『お誕生日おめでとう』のサプライズをする」「『いつも親切ありがとう』の垂れ幕をつくる」

など、マイナスのベクトルをプラスに転じていくのです。

*

私自身、未消化なことが多く、後悔の残るミニレクチャーでした。しかし、避けて通れない問題でもあります。

「夜の学校」で、私も研鑽中なのです。